

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月27日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520344

研究課題名（和文）安徽省阜陽出土『蒼頡篇』漢簡に関する基礎的調査と研究

研究課題名（英文）Basic research and study on Anhui Fuyang Han Bamboo Slips “蒼頡篇”

研究代表者

張 娜麗 (ZHANG NALI)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20197635

研究成果の概要（和文）：(1) 本研究の第一の成果は、今日まで不分明であった阜陽漢簡『蒼頡篇』の全容を十全な図版と釈文をもって提示できたことである。(2) 第二の成果は、調査によって獲得できた諸資料にもとづき、『蒼頡篇』の出土後の保存や研究の推移を解明したことである。(3) 第三の成果は、前漢代における『蒼頡篇』の字句の増補と、法家思想を留めた用語を置く阜陽漢簡『蒼頡篇』の表現の実態を究明したことである。

研究成果の概要（英文）：(1) The first result of this study is to have been able to show the whole aspect of Fuyang Han Bamboo Slips “蒼頡篇” —which had been unknown until today— with perfect plates and interpretations of the record. (2) The second result is to have elucidated the change of preservation and the study after the exhumation of “蒼頡篇” based on the material which I had been able to acquire. (3) The third result is to have investigated the enlargement of the words of “蒼頡篇” in Western Han Dynasty and the actual situation about the expression of “蒼頡篇” that is having the terms which kept the Legalist Thought.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：書誌学・文献学

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景は次のようであった。

(1) 1977年、安徽省阜陽市(旧阜陽地区)の双古堆において、前漢第二代汝陰侯夏侯竈の墓葬が発見され、その墓室中から大量の文字竹簡が発掘された。この文字資料は、発掘後、1978年、1983年の二度にわたり、阜陽博物館等によって、発見、発掘の概況と検出された『詩経』『周易』及び佚書『蒼頡篇』についての釈文と初歩的研究が『文物』誌上に公表された。こうした中、『蒼頡篇』残簡の文字数が、20世紀初頭以来、発掘、収集されて来たものの総数をはるかに上回るものと報ぜられたが、その全原品の図版写真、データ等が明示されなかったため、以後現在に及ぶ間これに関する研究が極めて限定的なものとなり、進展がはかられ難くなった。

(2) 竹簡自体のもつ文字情報を存分に引き出し、これらを学界の共有の材として用いることが出来るようにすることは個々の研究者が切望するところであり、これを成し遂げたのちに、研究の進展がはかれることになる。そのため、研究代表者は、平成21年、現地訪問を行い、阜陽出土残簡等を実見したが、その原品には、出土後の事故により原形を留めない姿となったものがあり、さらに劣化が日増しに進んでいることを直に知り、原簡精査と資料化をはかることが急務であると実感するに至り本研究を推進することとなった。

2. 研究の目的

本研究は、中国安徽省阜陽市から出土した前漢代の残簡『蒼頡篇』について、原品の精査を進め、遺文のデータベース化をはかり、それらを学界に提供するとともに、古籍の原形を復元して、古代文字資料としての阜陽漢簡『蒼頡篇』、古代識字教育課本の内容の分

析をはかり、またその伝承と流布の実態を明かそうとするものである。

3. 研究の方法

本研究は、阜陽出土『蒼頡篇』残簡の全体像の把握に不可欠な、目視観察、計測、写真撮影、模写、校録、分析等の諸方法を十分に用いて、これを進める。

(1) まず、所蔵機関他現地の支援や協力のもとで、原簡遺品を個々に観察、写真撮影、文字の判読、模写などを進める。原資料に対しての精査を行い、文字の各々を採録してそれらをデジタル資料化しながら書写法、書式等の分析を進める。

(2) さらに敦煌・居延出土の『蒼頡篇』簡牘との比較も行い、漢代字書の史的変遷を辿るための基本資料を作成する。

(3) 次に、それらを用いて、秦漢代の字書に対して検討を加え、伝世佚文資料をまじえて、『蒼頡篇』の表現内容の分析も行い、古代字書、課本としての同篇がいかような変貌を遂げて、どのように流布して依用されて来たのかについて究明する。

4. 研究成果

本研究で得られた成果は次の各々である。

(1) 旧来、内外の研究諸家がさまざまな試みをしてかなわなかった現地訪問を果し、阜陽漢簡『蒼頡篇』の全容を精査、把握して、これを精密な図版、摹本と共に基礎資料として学界に提示できたこと。『蒼頡篇』本文研究の基盤を据えたところが本研究の成果の大きな一面であり、この成果は、日本、中国等の内外の研究者が利用可能なもので、これによって1990年代以降、停滞していた古代識字字書『蒼頡篇』研究が再始動可能となるはずである。

(2) 竹簡に抄写された墨書の一々を確認、

残墨、残画の遺存するものを含め、その悉皆を採録し、また、残画の綴合も進めて、一部の句文の復元も果たした。この結果、先学の積読の錯誤等も分明にし得、また、北京大学所蔵漢代竹簡『蒼頡篇』が一部公表されている段階であるが、旧来、西域地区から出土していた『蒼頡篇』関連遺文を含めて、李斯原撰の『蒼頡篇』に迫る道筋を設け得ることができた。抄写、句文の復元から、秦末、漢初の混乱期を経て漢文帝、漢武帝代に至り、さらに変容を遂げる一面を推定することが可能となったことである。また、阜陽漢簡『蒼頡篇』遺文は、零細な残片も含めて、総数 136 点があることが確認された。

(3) 竹簡の編綴についても精査。原品で確認不能なものは、旧写真、新写真の分析によって究明することができたこと。このことについては、向後の研究の基盤となることもあるため、その概要を下記しておく。

① 阜陽漢簡は文字の字詰めが不統一、字間にも相当な差が存在し、同一簡でもその疎密が認められた。

② 文字抄写には簡の編綴部を避けて記したものと否とのものが混在、数種の書法が行なわれていたことが観察された。

③ この結果、編綴される前と編綴された後に文字を書寫していたであろうことが推考された。

④ 阜陽出土『蒼頡篇』竹簡は、遺存する編綴間の様から、上中下の三か所で編綴されていたことが確認された。

⑤ 上、中編綴間の書寫字数は、概ね 8～10 字程度、中、下もほぼ同じく文字が鈔寫されていたものと見られ、上下端は 1～2 文字分の餘白があり、一簡中には 23～26 文字程度が書記されていたものと見られた。

⑥ C 003、C 089、及び C 004 の書字と

残長から、各簡の原長は、概ね 26 cm 程度となり、漢尺の 1 尺 1 寸程度が素材であったと推考された。

⑦ 阜陽漢簡『蒼頡篇』は、北京大学蔵『蒼頡篇』に比し、字詰めと書式に大きな違いがあり、常規を設えない書写実態が観察され、書写目的が異なると推定された。

なお、諸家の研究の素材となる各簡の計測値の一覧表は附録に掲出した。

⑧ 阜陽漢簡『蒼頡篇』の書写文字そのものは篆隸の形を残すものもあるが、奇異な古字の字形を留めるものではなく、隸書の初期の筆態を留めるものが主体となっていることが確認された。

(4) 精査、整備し得た資料をもとに、『蒼頡篇』の字句の分析も行い、次の二点を闡明し得たこと。

① 旧来喧しく、漢代削除（阜陽簡）、漢武代増補（北大簡、水泉子簡）、漢文代脱写（阜陽簡）、といった各研究者の論説が出されていた「胡無嚙類」～「百越貢織」の四句について論究したこと。阜陽漢簡『蒼頡篇』に見られず、西域出土遺品、及び北京大学簡第二に見られるこの四句の来源を追究し、論究し得たことである。

端的に言えば、戎翟と俗を同じくして興った秦の実態や「戎翟」「百越」を綴る遺文が漢初、及び漢武代に徴されること、また、酷刑の「醢」が漢文帝代には停止された事情が確認されることと共に前後接続する句文中に同一の文字を置いているこの四句の実態などから、この句は、漢武代に、漢皇稱揚のために増補したものと論究したことで、当時の有力な識字者がこれにかかわっていたことを推定したことである。

② 現在「事故簡」となり、枯燥変形してしまった C002 は、甲論乙駁の多くの論議が行われているものであるが、この簡の最初期の写真には、「天」字上接字の残画を残す小三角形の部位が写し出されており、研究者が「天」字の上接部を「兼」と採録した由来、及び、頭初左右に割っていて整理的にこれを接合しつつ撮影したため、文字の右部上下に線が引かれていたかのように写し出されていた同簡中の「政」字の実情を確認したこと。なお、この「政」字を含む「政勝誤亂」の語解は、諸先学が誤解していたことを、この語句の来源である『商君書』の実例を突き止めて解明したこと。この句を含めて李斯原撰と伝承される『蒼頡篇』の語句の根幹に法家思想を濃密に漂わせる述語が取り入れられていることをはじめて闡明した。

(5) 関係諸機関、諸家の支援のもとに、新旧、細大阜陽漢簡『蒼頡篇』に関するすべての写真及び図版を本研究の結果報告書に掲出し得たこと。

(6) 『蒼頡篇』の字句の研究の資料として、玄應撰述『一切経音義』中に所引のものを一覧表として付したこと。なお、『文選』注文、『明心寶鑑』等にも『蒼頡篇』にかかわる字解の句文の引用があるが、それらについては別稿を準備している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 張娜麗, 敦煌本P. 2901について, 筑波大学人文社会系現代語・現代文化専攻『論叢 現代語・現代文化』査読有、Vol.9,

2012、 pp. 45-76

- ② 張娜麗, 阜陽漢簡『蒼頡篇』の現状と「政勝誤亂」の語解、中国・武漢大学『中國簡帛學國際論壇2012秦簡牘研究 論文集』、査読有、2012、pp. 336-344
- ③ 張娜麗, 字學大德玄應法師事跡小攷, 筑波大学人文社会科学研究科現代語・現代文化専攻『論叢 現代語・現代文化』査読有、Vol.7, 2011、pp. 1-25

[学会発表] (計 1 件)

- ① 張娜麗, 阜陽漢簡『蒼頡篇』の現状と「政勝誤亂」の語解、中国・武漢大学「中國簡帛學國際論壇 2012」、2012 年 11 月 19 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

張 娜麗 (ZHANG NALI)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20197635